

# ラップ・フランセから見るフランス社会

高村 あゆみ  
指導教授 上原 良子

## 〈論文要旨〉

本論文では、1990年代初頭にラップブーム<sup>1)</sup>として盛り上がりを見せたフランスを代表するMCソーラー、IAM、NTM<sup>2)</sup>という3組のラップ・フランセのグループの分析を通じて、ラップという反体制的ギャング・カルチャーが、「文化国家」フランスにおいて一大ブームを起こすまでに発展した背景を考察する。この3組のラップ・フランセのパフォーマーは1998年の調査で、好きなラッパーベスト5に入っている、いわばフランスの若者に最も人気のあるラッパーである。また文学的なクールラップのソーラー、マルセイユのラップIAM、そしてハードコア、ギャングスタラップのNTMというように、それぞれ3つの異なるスタイルのラップパフォーマーたちである。

MC.ソーラーは文学的ラッパーとしてオリジナルのアメリカンラップをモデルとしては継承しつつも、政治家にフランス語保護の救世主だとまで評価されるラッパーである。極右政党であるとして国民戦線の支持者が人口の20パーセントを占めるマルセイユ出身のIAMは、移民排斥を訴える国民戦線に対し暴力や血ではなく、ラップを通じた闘いを挑んでいる。さらに、パリのバンリュウ出身のNTMは、社会的に隔離されたバンリュウやシテと呼ばれる地区に暮らす移民の若者が感じている絶望感や、むなしさ、フランス社会の不平等さを、辛らつな歌詞にこめていたのである。これらフランスを代表する3組のラップグループの分析を通じて、ラップ・フランセの特徴のみならず、移民の若者の社会的諸相を明らかにすることが可能であろう。

研究史においてもこうしたラップの分析は単にその音楽性を越えて文化論、社会論におよんでいる。プレボは、アメリカ文化としてのラップがどのようにフランスで受容されていったか、オリジナルのアメリカンラップとフランスでのラップのテキストやテクニクにおける相違を中心に考察し、テクニクやラッパーとしてのライフスタイルは、大部分においてアメリカンラップやラッパーを手本していることを指摘し、フランスにおけるアメリカニゼーションの一形態としてラップを考察している。同時に、ラップのテキストに関しては必ずしもアメリカのラッパーとは同じではなく、フランスの伝統的なポピュラー音楽や文化的要素の影響を受けていることも指摘している<sup>3)</sup>。

またルパ・ヒュック<sup>4)</sup>は、フランスにおける移民の若者の反体制、対抗文化として機能している若者文化、マイノリティ文化としてのラップを考察し、ラップ・フランセがフランス生まれのアラブ人二世や三世の、ブル達のアイデンティティ形成に機能していることを指摘している。陣野俊史は2005年11月にパリ郊外クリシー・スー・ボワから起こった移民暴動から、移民の若者たちに広まる不満のはけ口としてのラップを考察している。移民法の変化や移民に関する事件と、それに呼応した形で発表されたラップのテキスト分析を通して、フランス政府の移民政策や移民に対する世論の反応に、フランスに住む移民の若者がラップという手段を使い、どのように反応したのかを分析している<sup>5)</sup>。

この様に、これまでのフランスにおけるラップの研究は、プレボが行ったようなアメリカニゼーションの一部としてのラップ・フランセの誕生として、いかにアメリカ文化としてのラップがフランス的にローカライズされたのかという議論や、ルパや陣野が考察したような社会から疎外されたと感じているフランスの移民の若者が、ラップを通して社会への不満を噴出していった、というような議論が試みられてきた。

つまり1990年代に活躍したラッパーたちの多くは、1960年代後半から1970年代に生まれた移民であった。オイルショックによる不況、ジスカール・デスタンによる国境閉鎖など、移民排斥運動がもっとも

激化することにより、移民問題が可視化し、移民にとっての転換点であって1974年前後をフランスで過ごした彼らは、常にフランスで居心地の悪さを感じていたのである。そうした彼らのラップには、反体制的なテキストや、カウンター・カルチャーとしてのラップの要素を見出すことができよう。

さらに本稿では、1980年代は、フランスの文化政策、移民政策の転換点であったことに注目した。つまりミッテランへの政権移行によって誕生したジャック・ラング文化省の時代は、若者文化やマイノリティ文化を保護し、多文化主義の可能性を模索し始めた一方、ジスカール期の移民締め出し政策とは逆に、移民の統合を模索し始めた時期でもあった。ラップが移民の若者だけでなく、いわゆる白人のフランス人にも受け入れられるようになってきたのもまた1990年代初頭からであった。加えてフランスにおいてラップが登場した1980年代初頭から半ばにかけてのラップは、ほとんどがアメリカの模倣であったが、ようやくフランスらしさが加えられ、ラップ・フランセという独自のラップが誕生し始めたのは1980年代の末から、1990年代に入ってからであった。

そこで第一部では、1990年代のラップ・フランセを中心に考察すると同時に、ラップ・フランセを受容・発信したフランスの移民、特にプールと呼ばれるアラブ系の移民二世や三世について考察を行なった。ラップという反体制的文化をなぜ彼らが必要としていたのか、ラップ・フランセとフランス社会における移民を分析した。そして第二部ではラップ・フランセが普及、流行していくにあたり、大きな役割を果たすこととなった、フランスの文化政策についての考察を行なった。

フランスにおいて、ラップ・フランセが一大ブームを起こすまでに発展した背景には、第一に1980年代から90年代初頭にかけてミッテラン社会党下で行なわれた文化政策の大規模化が大きく関わっていると考えられる。つまり、ミッテラン社会党政権下において、ジャック・ラング文化大臣主導の文化の民主化により、一般大衆文化やそれまではアメリカ文化であると考えられていた文化が、フランス文化として政府の保護や支援の対象となっていったことがある。ラップ・フランセも例外ではなく、政府の文化支援の庇護を受けた。また、アマチュア・アーティストや若者の文化活動支援の一環として、ラップのパフォーマーが育成されやすい環境があったことも事実である。さらに、1982年のラジオの自由化によりラジオ番組が多種多様となり、ラップ専門チャンネルの創設や若者音楽番組の放送を通じてラップ・フランセが流されることにより流行、そしてテレビのチャンネルさえこの時期に多様化し、音楽専門番組が登場したのも1980年代後半のことであったし、CD（コンパクト・ディスク）の普及も同時期であった。これら全ての要因が、ラップ・フランセの普及に影響をおよぼした。

1980年代にフランスで誕生した、ラップ・フランセは、90年代に入り、一大ブームを起こした。ミッテラン政権下において1982年から文化大臣の座に就いたジャック・ラングによる文化の民主化は、それまでは、「文化」とされていなかった大衆文化を、文化の枠に入れ、この文化政策における改革によって、ラップのパフォーマーが生まれやすい環境が作られた。あるいは、ラップ・フランセの普及にあたって重要な、メディアの非国有化がこの時期に行われることで、ラジオやテレビのチャンネルが多様化し、ラップ・フランセがメディアから発信される機会が大幅に増加したのであった。

1990年代初頭、フランスにおけるラップミュージックが全盛期をむかえる。ラップのCDが発売されれば、それはディスク・ドール賞、すなわち10万枚以上の売り上げが約束されていたこの時代、NTMやIAMをはじめとするフレンチラッパーたちをもっとも活躍していた時期である<sup>9)</sup>。このラップブームの原因を、陣野氏は1986年から始まるコアビタシオン期以降移民法の改正に伴い移民への風当たりが強くなりつつあったことで、彼らのレトリックがより辛辣になり、その過激さに興味を持った人々が多かったことからCDの売り上げを増やした、と述べるが、ラップブームの背景に隠れているのは、実は文化国家フランスにおける、文化政策にあったのではないだろうか。特に、ラップが全盛期を迎えることとなる1990年代初頭の直前、1980年代から1990年代初頭は、ミッテラン社会党政権下においてジャック・ラングによる文化政策の拡大が行われた時期であり、あるいはメディアの自由化が図られた時代でもあったことから、これらの文化政策がラップ音楽の普及を容易にしたことで、この時期にラップが普及し

たとえる根拠がここにあるのではないかと考えられる。

このようにフランスにおいてラップミュージックが移民の若者たちだけでなく、フランス人の若者たちにも聞かれるようになった背景には、ミッテラン政権化における文化政策の大規模化により、ポピュラーミュージックや、若者音楽のアーティストが誕生しやすく、また、メディアの自由化の動きと連動して、ラップがより広く発信されやすくというラップが普及しやすい環境が存在した。

さらに第二点として、ラップ・フランセは単なる、移民やブールたちの不満のはけ口であっただけではないのではなく、むしろフランス人の若者全体の不満がこめられていたことも、ラップ・フランセが受容された理由であると考えられる。これは、ミッテラン政権下で行われた移民統合政策がある種成功して、若者の間に連帯感が生まれていた証なのではないだろうか。また、当時から現在に至るまでフランスの社会問題の一つとしてフランスにおける移民統合の可能性が隠されていたのではないだろうか。なぜなら、普及しやすい環境があったところで、その音楽を受容する人がいなければ、数十万枚を超えるCDの売り上げは達成しえない。その売り上げ枚数は、フランスのバンリューだけでは決して得ることのできない数であり、これはラップ・フランセがフランスの中産階級の白人たちの間でも、広く不動の人気を得たことを証明しているのである<sup>7)</sup>。この白人の中流階級の若者が反体制的ラップ・フランセを好んで受容していた背景には、ラップ・フランセの歌詞にこめられているメッセージに共感する部分が多くフランスの若者の間にあったからなのではないだろうか。そして、移民と、中流階級の白人のフランス人が、「同じ感情を共有する」ということはつまり、1980年代後半から、90年代前半にかけて行われた、移民統合政策がある意味で成功し、若者の間で、ブールをはじめとする移民たちがフランス人の一部として認められてきた証と考えることができるのではないか。

ミッテラン政権下で行われたフランス型移民統合政策のもとで特に1980年代後半から1990年代初頭において、フランスの若者と移民二世や三世との連帯が存在しフランスの若者に共通する高い失業率というものも、この連帯をさらに強めたと考えられる。フランスにおいて、1990年以来、常に最も失業率が高いのは、15歳から24歳までの男女である。ミッテラン期の統合政策に加え移民、非移民を問わず社会に対する共通の不満から、当時の若者はそれまでのフランス人が持っていなかった人種を超えたフランス人の若者としての、連帯感を持つようになっていた。そして、この連帯感こそ、フランス人の若者にラップを受容させるきっかけとなった。つまり、移民の若者が社会に対する不満を持っていたのと同様、フランス人の若者も、同様の不満を持っており、反体制的なラップに共感する部分が少なからず彼らの中にも存在していたのである。

1990年後半以降も、ラップ・フランセはフランスのCD売り上げランキングから外れることはなく、常にその地位を保持し続けていった。あるいは、フランスの音楽界におけるラップ・フランセは1990年後半以降、さらに高いものとなっていたとも言える。陣野氏はこの原因として、やはり90年代に以降の移民法の改定に見ている。つまり90年代に入り、議会で右派が過半数を占めるようになってから成立した1993年改定移民法（通称パスクワ法）や、国籍法修正案（メニューリー法）等、外国人の権利を縮小する法案が可決され、93年の改定移民法（通称パスクワ法）や国籍法修正案（メニューリー法）により、フランスへの入国も、滞在した場合の保護も大幅に制限された。この法律のもと、フランスで生まれた外国人の子供は、それまで自動的に与えられていたフランス国籍を16歳から21歳の間に「自らの意志で」申請することが義務づけられ、「本人の意志によってフランス人となることを選択した者にしか国籍を認めない」という方針が強化された。また、97年の移民法通称ドゥブレ法は、移民の滞在許可証の更新を認めないという更に厳しい内容となり、これらの右翼的な移民政策と連動して、移民がラップで不満を吐き出していたことで、ラップはむしろ活発化した。

第三は、フランス語保護政策の影響である。こうしたラップ・フランセのさらなる普及においても、フランスの文化政策が関わっていると考えられる。とりわけ、1994年に成立した、「フランス語使用法」、通称トゥーボン法の成立が、ラップ・フランセのさらなる普及にとって、非常に大きな影響を与えた。これ

は、「フランス語の使用を法律で義務付ける法律」<sup>8)</sup>であり、「フランス語を“浄化”する、英語追放への新法案」<sup>9)</sup>である。

トゥーボン法により、例えばラジオで朝6時から夜10時半まで流される音楽の40パーセント以上はフランス語のものではなければならない、という規制が設けられた。世論調査機関であるIPSOS Musicが、フランスの主要29局で流される全曲目を月単位で分析し、国の諮問機関であるCSA（視聴覚高等評議会）やSACEM（著作権協会）などに報告している<sup>10)</sup>。違反局にはCSAが警告を出し、改善されなければ放送の合間に違反していた旨を告げるメッセージを流させたり、一時放送中止という厳罰もあり、それまではアメリカのラップと人気を二分していたラップ・フランセも、フランスの音楽ラジオ放送において流される回数は増加せざるを得なかった。これにより、当時若者の間で流行し始めていたラップ・フランセが毎日のように放送されることとなり、ラップ・フランセのさらなる普及に拍車がかかったのである。

フランスにおいて、ラップ・フランセは当初はバンリューの移民から支持され受容された。そして80年代の文化政策によりパフォーマーが増え、あるいはバンリューの移民以外の人にもそのスタイルを紹介する機会が増えたことで徐々にその受容者を増やしていくと同時に、資本主義と連動し、受容者であるフランス人の好みに合わせてそのスタイルを変化させていった。その一方で反体制的要素をまったく失っていないラップ・フランセも同時に存在し続けたのであった。

年表-1 MCソーラー、IAM、NTMの発売アルバム年表

1991	MCソーラーのファーストアルバム、Qui sème le vent récolte le tempo（身から出た錆が40万枚を売上げ、ディスク・ドール賞を受賞。 IAMのファーストアルバム、De la planète mars（火星からの侵略）が、ディスク・ドール賞受賞。 NTMがファーストアルバム、Authentique（正真正銘の）をリリース、4万枚を売り上げる。
1993	IAMのセカンドアルバム、Ombre est lumière（闇は光）が30万枚売り上げ、ディスク・ドール賞受賞。 NTMのセカンドアルバム、J'apuie sur la gâchette（俺は引き金を引く）が、7万枚を売り上げる。
1994	MCソーラーの二枚目のアルバム、Prose Combat（散文の闘い）が10日で10万枚という速さで売れ、ラップ・フランセ史上初となるミリオンセラーを達成する。
1995	NTMの3枚目のアルバムParis Sous Les Bombes（爆弾の下のパリ）が15万枚の売り上げで、初のディスク・ドール賞を獲得。
1996	NTM、Come Again 2 Le Retourをリリース。
1997	MCソーラー、Paradisiqueをリリース。 IAM、L'école du micro d'argent（脱拜金主義）をリリース。
1998	MCソーラー、MC Solaarをリリース。 NTM、Suprême NTzMをリリース。
1999	MCソーラー、Le tour de la questionをリリース。

## [注]

- 1) MCソーラー、IAM、NTMの1990年代のCDアルバム売り上げは、年表-1を参考のこと。この時期に初めて、ラップ・フランセがディスク・ドール賞を受賞し、100万を超えるミリオンセラーとなった、MCソーラーのProse Combat（散文の闘い）が発売されたのも1994年であった。
- 2) NTMは、グループ名を、NTMから、Supreme NTM、Supreme NTM93等に度々変更しているが、本論文では、NTMに統一している。
- 3) André. J. M. Prévos, “Rap and Hip Hop in France: The Americanization of popular music in Europe” in Melting Phil and Roper Jon (eds.), *Americanization and the Transformation of World Cultures Melting Pot or Cultural Chernobyl?*, New York: The Edwin Mellen Press, 1996, p.102.
- 4) Rupa Huq, *Global Youth Cultures in Localized Spaces: The Case of the UK New Asian Dance Music and French Rap*, in David Muggleton, Rupert Weinzierl (eds.), *The Post Cultures Reader*, New York: Berg, 2003.
- 5) 陣野俊史『フランス暴動 移民法とラップ・フランセ』河出書房新社、2006年。
- 6) RFI、フランス国営ラジオ放送ホームページ。
- 7) Rupa Huq, “Global Youth Cultures in Localized Spaces : The Case of the UK New Asian Dance Music and French Rap”, in David Muggleton, Rupert Weinzierl (ed.), *The Post Cultures Reader*, New York: Berg, 2003, p. 198.
- 8) 朝日新聞、1994年5月7日。
- 9) 毎日新聞、1994年6月8日。
- 10) 調査方法は、対象局の全放送を常時DATに収録した後、曲名、歌手名、ジャンル、使用言語などのデータをデジタル信号として分類、蓄積。ここまですべてが自動で、最終的には数人のスタッフが、コンピュータ上で音を確認しながら整理している。

## [主要参考文献・参考資料]

### 〈洋書参考文献〉

- BALIBAR Etienne and WALLERSTEIN Emmanuel, *Race, Nation, Class : Ambiguous Identities*, Verso, 1992. (エティエンヌ・バリバル、エマニュエル・ウォーラーステイン著 (若森章孝、須田文明、奥西達也訳) 『人種・国民・階級—揺らぐアイデンティティ』、大村書店、1997年。)
- BELKHODJA Chedly, “Le gangsta rap: une atteinte au theme de la noirceur”, *Argument Politique, societe, et histoire*, Quebec: Les Press de l’Université Laval, 1999.
- BERNARD Philippe, *Immigration : Le Défi mondial*, Paris: Gallimard, 2002.
- BOELDIEU Julien et BORREL Chatherine, “La population d’immigrés est stable depuis 25 ans”, *INSEE première*, n° 748, novembre 2000.
- CACHIN Olivier, *L’offensive rap*, Paris: Découvertes Gallimard Musique, 1996.
- CHARBONNEAU Nicolas et GUIMIER Laurent, *Docteur Jack & Minister Lang*, Paris: Le cherche-Midi, 2004.
- DELAUNAY Daniel et TAPINOS George, “La mesure de la migration clandestine en Europe”, *Population et conditions sociales*, mars 1998, n° 7.
- ELING Kim, *The politics of cultural policy in France*, London; Macmillan press LTD, 1999.
- FERNANDO S.H., *The New Beats-Culture, musique et attitudes hip-hop*, New York: Anchor Books, 2000.

- HAMMER, T. (ed.), *European Immigration Policy*, Cambridge Univ. Press, 1985.
- HARGREAVES G. Alec, *Immigration, 'race' and ethnicity in contemporary France*, London, New York: Routledge, 1995. (アリック・G・ハーグリーブス著 (石井真一訳) 『現代フランス移民からみた世界』、明石書房、1997年。)
- HUQ Rupa, “Global Youth Cultures in Localizes Spaces: The Case of the UK New Asian Dance Music and French Rap”, MUGGLETON David, WEINZIERL Rupert (ed), *The Post Cultures Reader*, New York: Berg, 2003.
- KIDD William, REYNOLDS Sian (Eds.), *Contemporary French Cultural Studies*, New York: Arnold Publication, 2000.
- KUHN Raymond, *The Media in France*, London and New York: Routledge, 1995.
- LAROSE Jean, PICHETTE Jean, *Argument: Politique société et histoire*, Les Presses de l'Université Laval, 1999.
- MARTI Pierre-Antoine, *Rap 2 France*, Paris: L'Harmattan, 2006.
- MENDRAS Henri, *La seconde Révolution française 1965-1984*, Paris: Gallimard, 1988.
- MINCES Juliette, *La génération suivante: Les enfants de l'immigration*, Paris: Flammarion, 1986.
- PERRY Sheila, CROS Maire, *Voices of France: social, political and cultural identity*, London and Washington: Pinter, 1997.
- POIRRIER Philippe, *La politique culturelle : Société et culture en France depuis 1945*, MEMO, Paris: Seuil, 1998.
- PREVOS J.M. André, “Rap and Hiphop in France: The Americanisation of popular music in Europe”, *Americanisation and the transformation of world cultures-Melting pot or Cultural Chernobyl?*, New York: The Edwin Mellen Press, 1996.
- REGOURD Serge (ed.), *Problèmes politiques et sociaux : De l'exception à la diversité culturelle* No.904 septembre 2004, Paris: La documentation française, 2004.
- RICHARD Jean-Luc (éd.), *Problemes politiques et sociaux, Les immigrés dans la société française septembre 2005*, Paris: La documentation Française, 2005.
- RIGAUD Jacques, *La culture pour vivre*, Paris: Gallimard, 1975.
- RIGAUD Jacques, *Une politique culturelle pour la France, Paradoxes*, sept-oct. 1978.
- ROSELLO Mireille, “Rap Music and French Cultural studies”, in LE HIR Marie-Pierre and STAND Dana, *French Cultural studies*, State University of New York Press, 2000.
- SCNEIDER Michel, *La comédie de la culture*, Paris: Seuil, 1992.
- DE WARESQUIEL Emmanuel (ed.), *Dictionnaire des politiques culturelles de la France depuis 1959*, Paris: Larousse, 2001.
- WARNE Chris, “Articulating identity from the margins: Le Mouvement and the rise of hip-hop and raga in France”, *Voices of France Social, Political and Cultural Identity*, London: Pinter, 1997.

#### 〈日本語参考文献〉

- イヴ・レオナルド編 (植木浩監訳、八木雅子訳) 『文化と社会』 芸団協出版部、2001年。
- エマニュエル・トッド (石崎晴己、東松秀雄訳) 『移民の運命—同化か隔離か』 藤原書店、1999年。
- カトリーヌ・ヴィトール・ド・ウェンデン (宮島喬訳) 「フランスにおける移民と移民政策」 D トレンハルト編 (宮島喬訳) 『新しい移民大国ヨーロッパ』 明石書店、1994年。
- ジェラード・デランティ (佐藤康行訳) 『グローバル時代のシチズンシップ』 日本経済評論社、2004年。
- ジェラルド・ノワリエル (吉田徹訳) 「フランスの移民統合モデルは有効か」 『ル・モンドディプロマテ

- ーク』2002年1月号。
- ジョン・フィクス（山本雄二訳）『抵抗の快楽—ポピュラーカルチャーの記号論』世界思想社、1998年。
- パスカル・オリ（岸清香、剣持久木訳）「文化政策—フランス・モデルは存在するのか？」『国際関係・比較文化研究』静岡県立大学3（1）、2004年。
- ベネディクト・アンダーソン（白石さや・白石隆訳）『想像の共同体』NTT出版、1997年。
- マーク・コステロ、デイヴィッド・フォスター・ウォーレス（佐藤良明監修、岩本正恵訳）『ラップという現象』白水社、1998年。
- マルク・フェマロリ（天野恒雄訳）『文化国家—近代の宗教』みすず書房、1993年。（Marc Fumaroli, *L'ETAT culturel; Essai sur religion moderne, Editions de Fallois, 1992.*）
- ミュリエル・ジョリヴェ（鳥取絹子訳）『移民と現代フランス—フランスは「住めば都」か』2003年、集英社。
- 小林雅明「フレンチ・ヒップホップ」『現代思想』10月号、1997年。
- 酒井麻実「ラップというトポス」『Lutece』（大阪市立大学フランス文学会）、2004年。
- 酒井麻美「フレンチ・ラップの現状と傾向について」『フランス文学論集』（甲南女子大学大学院文学研究科フランス文学専攻）、No.15、2001年。
- 柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦編『フランス史 3』山川出版社、1995年。
- 陣野俊史『フランス暴動 移民法とラップ・フランセ』河出書房新社、2006年。
- 友岡邦之「時代に適応する「国民文化」—1980年代フランスにおける文化政策の大規模化をめぐって」『ソシオロギス』（東京大学大学院社会学研究科ソシオロギス編集委員会）、No.21、1997年。
- 中野裕二『フランス国家とマイノリティ』国際書院、1996年。
- 中野裕二「統合原理を模索するフランス」宮島喬編『現代ヨーロッパ社会論』人文書院、1998年。
- 畑山敏夫「ミッテラン政権下の移民と政治」西堀文隆編『ミッテラン政権下のフランス』ミネルヴァ書房、1993年。
- 原輝史、宮島喬編『フランスの社会—変革を問われる文化の伝統』早稲田大学出版部、1993年。
- 本間圭二『パリの移民・外国人 欧州統合時代の共生社会』高文研、2001年。
- 前平泰志「移民労働者の子供と公教育制度」原田種雄ほか編『現代フランスの教育』早稲田大学出版部、1988年。
- 三浦信孝『現代フランスを読む』大修館書店、2002年。
- 三浦信孝編『普遍性か差異か』藤原書店、2001年。

〈参考ホームページ〉

INSEE（国立統計経済研究所）[http://www.insee.fr/fr/home/home\\_page.asp](http://www.insee.fr/fr/home/home_page.asp)

RFI（フランス国営ラジオ放送）<http://www.rfi.fr/>